

1 研究の概要

(1) 研究主題

鑑賞の授業によって、見方や感じ方について根拠を考えることのできる生徒の育成
—V T Sの理論を基にした対話活動を通して—

(2) 研究主題設定の趣旨

中学校における美術科の学習は、生涯学習において、生徒が自分の意味や価値を創りだす入口です。美術科は、美術文化についての理解を深め、生涯にわたって「美術」を愛好する心情を育てる教科です。高等学校では、芸術科は選択して履修することになっており、生徒によっては、中学校が学校で美術を学ぶ最後となる可能性があります。

作品を見る行為、鑑賞は受動的なものという捉え方ではなく、生徒自身の感覚や行為に基づいた能動的な活動であることに配慮し、生徒の見方や感じ方を深めるための鑑賞の授業を充実させたいと考えます。中学校学習指導要領 B鑑賞の指導事項アは、以下のように示されています。

ア 造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫、目的や機能との調和のとれた洗練された美しさなどを感じ取り見方を深め、作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合うなどして、美意識を高め幅広く味わうこと。

文部科学省 『中学校学習指導要領』 平成20年3月 第6節 美術 第2 各学年の目標及び内容〔第2学年及び第3学年〕より引用

作品に対して、価値意識をもって批評し合うなどしながら鑑賞を行うことは、能動的な活動であることが分かります。

生徒が能動的に鑑賞を行うことができるようにするために、色々な手立てが考えられています。

例えば、ニューヨーク近代美術館（MOMA）が示している鑑賞教育「ビジュアル・シンキング・ストラテジーズ（以下V T S）」について、フィリップ・ヤノウィンは、「V T Sを介して彼らが身に付けていく『複合的能力』とは、観察、解釈、根拠を持った考察、意見の再検討、そして複数の可能性を追究する力なのです。」⁽¹⁾と述べています。鑑賞教育にV T Sの理論を取り入れて行うことで、鑑賞者（生徒）が「何を知ったか」ではなく、「今までの経験から知っていることをいかに活用したか」に注目して言語活動を行わせ、生徒が自由で個性的な発想や構想力、また、創造的な思考力を向上させるのに大きな力を発揮すると考えます。V T Sの理論を基に鑑賞教育を行っていけば、生徒の「なぜ？」に対して、作品のどこからそのように思ったのか、根拠はどこにあるのかを導き、作品をじっくり見ることにつながり、これから多くの作品に出会ったとしても「見る・感じる」そして、根拠について考えることにつながっていくと考えます。

アメリカの美術教育研究者V・ローウェンフィールドは「13歳～17歳を美術教育の最終の段階『決定の時期』」⁽²⁾と示しています。この時期の生徒は、論理的に考えることができ、物事を理解したいという思いが強くなり、さらには探求への好奇心が高まってきます。また、成長に伴って子供の見方から大人の見方へと変わる頃です。作品を素直に観ることができた幼少時期から価値基準で判断する時期に入り始めます。この時期の生徒に、V T Sの理論を基にした対話活動を取り入れた鑑賞の授業において、発言の根拠について説明させる活動を通して、感じたことや考えたことの根拠について考える生徒を育成することが可能になっていくと考えます。

以上のことから、V T Sの理論を基にした対話活動を行わせることで、自分の見方や感じ方について根拠を考えることのできる生徒を育成したいと考え、本研究主題を設定することとしました。

(3) 研究の目標

鑑賞の授業において、見方や感じ方について根拠を考えることができる生徒を育成するために、V T Sの理論を基にした対話活動を取り入れた鑑賞の授業の在り方を探る。

(4) 研究の方法

- ア V T Sについての理論研究
- イ 中学生の生徒を対象にした実態調査
- ウ V T Sの理論を基にした対話活動を取り入れた検証授業

(5) 研究の内容

- ア V T Sに関する文献調査をおこない、V T Sの理論をまとめました。
- イ V T Sの理論に沿った発問に基づく質問紙を作成し、生徒が作品をどのように鑑賞しているのかを調査しました。
- ウ 検証授業における、生徒の発言やワークシートの記述を基に、根拠を考えて作品を見ているかどうかを検証しました。

《引用文献》

- (1) フィリップ・ヤノウィン 『どこからそう思う？学力を伸ばす美術鑑賞ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』 平成 27 年 p. 7
- (2) V・ローウェンフェルド 『美術による人間形成』 昭和 38 年 p. 47